

愛染明王坐像

この愛染明王像は坐像であり、恐ろしげに歯をむき出し、真っ赤な顔をしている。中国の神獣である獅子の頭部をかたどった頭飾りを身につけ、6本の腕があり、そのそれぞれが様々な仏教の法具を持っている。これは愛染明王がたくさんの力を持っていることの象徴である。愛染明王は仏教における五大明王の一人であり、怒りに満ちた神として、人間の汚れた心を切り裂き、悟りへと導く。愛染明王の像は、2本腕、4本腕、そして6本腕で描かれることがあり、6本腕の姿が最も一般的である。その手には、征服を象徴する蓮の花の蕾や、幻想を切り裂く棍棒のような武器であるヴァジュラなどを持っている。この像は平安時代（794～1185年）につくられたもので、重要文化財に指定されている。胴体と頭部は一木造りで、手足は別に彫ったものを取り付けている。寄せ木造りと呼ばれる新しい造形手法の初期の作例である。愛染明王は真言宗などの密教における重要な神であり、仁和寺は真言宗御室派の本山だが、この像は愛染明王の彫像としては特に古いものであり、平安時代の仏教について理解するうえで、ますます貴重な仏像となっている。